

特集：高大接続・入学者選抜の改革が問うもの

趣 旨

現在、高大接続・入学者選抜に関する改革が、文部科学省主導で進められている。大学入試は高大接続・入学者選抜の一つの手段であるが、その影響は大きい。受験生にとってはもちろん、生徒を送り出す高校にとっても、彼らを迎え入れる大学にとっても、重要な意味を持つ。高校側にとっては、より多くの生徒を難関大学に入学させることで社会の評価が大きく左右される。受け入れる側の大学にとっても、優秀な学生を確保することは、教育・研究のあり方に大きな影響を与える。高校も大学も改革の動向には大きな関心を払わざるを得ない。

現行の大学入試では、「学力の3要素」なる概念が注目され、これを高校と大学の双方で連続的に形成することを強く意識していることが一つの特徴といえる。生徒や学生が獲得すべき学力の内容や性格には、高校と大学間で基本的な差異はなく、連続的に発展・形成すべきもの、またそれが可能なものというとらえ方である。進行中の改革では、基礎的・基本的な知識・技能だけでなく、それらを活用して課題を発見、解決に向けて探求し、成果を表現する能力等をも測定すべく、従来以上に多様な内容と方法で入試の実施が検討されている。

高校と大学間の接続関係は、従来は必ずしも明確に意識されてきたとは言いがたい。法令をみると、高校以下の各学校の教育目的に関する学校教育法の規定では、下級学校の「教育の基礎の上に」という文言があるのに対して、大学の目的規定ではそのような文言がない。また、現場サイドでも、高校・大学間での活発な意見交換や議論、それを通じた相互理解が十分に行われてきたとは言えない。

しかし、高等教育進学率が約80%、大学進学率も60%に迫ろうとする現在、大学側が高校教育の内容を無視ないし軽視して教育を行うことは難しい。高校教育の内容を無視して教育を行えば、学生たちが教育の内容を理解することは難しく、授業自体が成立しな

い。授業について行けないことを学生のみの責任に帰したり彼らの窮状を放置することは、教育機関として許されない。とすれば、この高校と大学をいかに接続させるかが課題となる。そのために、高大接続をめぐる問題とはいかなるものなのか、その実現のために何が課題であるのか、今次の改革が課題の解決につながるものであるのか等の基本問題の検討も必要である。本特集では、この問題について多様な角度から検討することにした。

荒井氏は、現在進行中の高大接続改革の背景や問題点・課題について述べている。本来異質である高校教育と大学教育を接続しようとすることに難しさがあること、欧米各国の事例の分析を通じて高大接続とは普通教育から専門教育への移行であること、日本はその視点が弱く入学者選抜に重点を置いてきたこと、また、今次の改革では学習指導要領を大学にまで貫徹させることが目標とされていること等を指摘した。

石井氏は、大学入試における共通テストの複数回実施の実現可能性について、日本のテスト文化、過去に複数回実施が見送られてきた理由や課題、近年のテストの実施状況等の観点から検討した。選抜試験にするか資格試験にするかというテストの活用法の問題等の課題があることを指摘した。

林氏は、各大学に設置されているアドミッション・オフィスの機能と役割について検討した。AO入試の導入経緯をふまえつつ、その現状や利点・課題に言及している。そのうえでいくつかの事例における選抜方法を紹介した。各大学においてAO入試等の企画・実施を担当するアドミッション・オフィスについて機能や役割、同オフィスの担う諸活動を遂行するために必要な能力について検討した。

永野氏は、入試関連業務に携わるアドミッション組織とそこに属する専任教員に課された業務について概観し、教員に求められる専門性、能力、資質等の内容やそれらの形成の方法について検討した。アドミッション組織の整備は国レベルの政策でも課題とされるが、学内での認知度や期待度は必ずしも高くないこと、雇用条件も良好とは言えないこと等課題を抱えていることを指摘した。

武藤氏は、国立大学入試担当課とその職員に求められる機能・職務遂行能力について検討した。中教審等での議論の中で、大学職員の専門職化が議論されるなど、入試担当課職員の能力開発が政策的にも課題とされていることを指摘した。とくに、企画立案機能と職員の養成方法に着目しつつ、入学者受け入れに関する業務の専門性や教職協働のあり方について検討した。

高大接続や大学入試は、入学時の一時期の問題ではなく、大学教育全体に関わる重要な構成要素でもある。大学学内のみならず学外の多様な関係者を巻き込んで、この問題に対する議論が深められることを期待する。

編集委員長 夏目達也